

# More English Fairy Tales 出版の意図

## —フェアリーテールの再話とその意図(3)—

藤 本 朝 巳

### 序 論

伝承の文芸を文章化する際、大きく分けて二つの方法がある。一つは、伝承の姿(型)をでき得るかぎり正確に記録する方法である。これは口頭で語り継がれた文化遺産を活字にして保存する(現在では電子データ化する)という意味合いを持つ。もう一つは、伝承されてきた話を何らかの意図をもって再話する方法である。つまり、聞き取られた(採集された)話を、あるいはすでに活字になって流布している話を、あらたに書き直す方法である。前者の場合、正確に記録するということが重要なことである。一方、後者の場合、再話者は正確さに重きを置くだけでなく、伝承の物語を基に、「再話」という創造的な書き直しのあり方をも重視する。

ところで、後者のように再話する際、再話者にはそれぞれの意図があるはずである。それゆえ、例えば、我々が伝承のフェアリーテールから再話された作品を評価しようと思えば、当然のことながら、その作品に対する書き手の意図を探ることになる。

この論考では伝承文芸の再話のあり方を考察する。ここでは、英国のジョゼフ・ジェイコブズ(Joseph Jacobs, 1854-1916)の『続 英国の昔話』(*More English Fairy Tales*, 1894)の内容と文体のありようを、彼が同フェアリーテール集の巻末に記した学術的記述などを参考にし、またフェアリーテールに関する各理論(語りの様式論)<sup>1</sup>に照らして検証したい。彼の再話を明らかにすることは、再話の方法を知る上で意義のあることである。というのも、これらの考察をすることで、一九世紀の英国の一人のフォークローリストが行った、伝承文学の再話方法を知ることができるからである。また当時、ジェイコブズが子ども読者向けの文体を作る上で、何を大切と考えていたのかがわかれば、時代を越えて生き延びる子ども向けの物語の特質を知る足掛かりになると思われるからである。

そしてこのような検証の結果が、今日、日本でも、再話者や語り手にとって再話のあり方やストーリーテリングの有効な資料となり得ると思われる。<sup>2</sup>

さて、伝承の文芸作品を評価しようとする場合、その作品の何をどう見るかは、読み取る側の関心や視点によって、それぞれ異なる。しかし、フェアリーテールの場合も、再話された各話に表れた思想や文体のありようが書き手の意図であろうから、評価を試みるとすれば、詰まるところ、著作物の内容や文体(語り口)をていねいに読み取り、分析することによって行わざるを得ない。それゆえ、もしも著者がその作品について注釈などを記していれば、その著者の再話意図は読み取りやすい。一方で、当時の人々が刊行されたばかりの、その著作に対して評価をしていますが、それは刊行された時代の相対的な評価にすぎない場合が多い。作品の真価は長い時間を経て公平に認められるものであろうから、当時の評価に惑わされないように、注意して見るべきである。ジェイコブズの残したフェアリーテール集が一七七年経た今も、英国の他の誰の作品よりも多く長く読み継がれている事実から、我々は、彼の再話した話がイギリスの代表的なフェアリーテール集として定着しているといつてよかろう。

## 1. ジェイコブズの再話への批判と反論

ジェイコブズは一九世紀末に、英国でフェアリーテール集を続けて刊行したが<sup>3</sup>、ジェイコブズと彼の著作を高く評価した人々<sup>4</sup>は、彼を英国のグリム(兄弟)と称し、彼のフェアリーテール集を「英国のグリム童話」と評している。そういえるとすれば、グリム兄弟のメルヒェンの内容や再話文体とジェイコブズのフェアリーテール集の内容、再話文体には、どのような関係を読み取ることができるだろうか。そもそも、グリム兄弟や彼の仕事には、どのような特質があったのだろうか。筆者は、彼らの特質(再話のあり方)を明らかにすることこそ、フェアリーテールの特質を知る上で、重要なことと考えている。

上記の問いに答える前に、はじめに、以下の事実を踏まえておきたい。ジェイコブズが彼のフェアリーテール集の第一巻(*English Fairy Tales*, 1890)を刊行した後、彼と、当時の民俗学者たちとの間で意見が分かれたという。ジェイコブズは続巻である『続 英国の昔話』(*More English Fairy Tales*, 1894)の刊行に際して、その序文に、自分の仕事に対して周囲から手厳しい批判があったこ

とを、以下のように記している。

My folk-lore friends look on with sadness while they view me laying profane hands on the sacred text of my originals. I have actually at times introduced or deleted whole incidents, have given another turn to a tale, or finished off one that was incomplete, while I have had no scruple in prosing a ballad or softening down over-abundant dialect. This is rank sacrilege in the eyes of the rigid orthodox in matters folk-lorical.

簡潔にまとめると、だいたい以下のようなことである。

1. ある話を再話する際に、別の話から素材を取って、元話にその素材を挿入したり、元話のある部分を削ったりした。
2. 物語が不完全に思えた時、その物語を完結させるために（終わりの部分を）書き直した。
3. バラッド（韻文で語られた詩歌）を散文化して物語った。
4. 方言で過剰に語られている話は、その方言の言い回しを和らげた。

すなわち、当時の民俗学者たちは彼が元話に手を入れて変えてしまった、と強く非難したのであった。こうした行為は、伝承文芸の型を厳格に保存すべきと考えていた正統の民俗学者の目には、侮蔑に値する冒瀆行為とみなされたのである。このような批判に対して、ジェイコブズは以下のように反論している。

私を批判している人たちは、偉大なJ.F. キャンベル氏の仕事を前にして、彼の残した資料でさえ、語り手がさまざまに話を修正してこなかったと信じているのだろうか。他の語り手と同じように、特に、せめてデボンシャーやランカシャーの農民と同じように、私は物語が英語で語られる際のストーリーテリングの方法を知っているが、私もそのような、同じ特権を持つてはいけないのだろうか。……そして以下が決定的な議論となるが、正統なる民俗学者諸君、あなた方は、グリム兄弟やアスビョルンセン（ノルウェーの昔話の再話者）の残した話を、それでも使い続けるおつもりであるのか。彼らは、私と同じことをしてきたはずではないか。

ジェイコブズの反論は、周囲の民俗学者の主張を見事に論破している。すなわち、過去の再話者たちが、ジェイコブズが行ったことと同じことをしてきたことを例に挙げ、先達たちは批判されず、なぜ同じ仕事をした自分だけが批判されねばならないか、と反問したのである。ゲール語に堪能なJ. F. キャンベルはスコットランド高地地方に伝わるフェアリーテールを収集し、ケルト語で出版した。これらの物語は、後に後進の人々によってゲール語、英語の対訳で出版された。グリム兄弟はドイツ地方に伝わるメルヒェンを再話して出版した（現在では、この物語の多くがフランスから移入された民話であることがわかっている。括弧内は筆者）。P. C. アスビョルンセン (Peter Christen Asbjornsen, 1812-1885。実際には、Jørgen Moe, 1813-1882 という協働の採集者・再話者がいた。括弧内は筆者) はノルウェーの津々浦々を探し歩いてフェアリーテールを収集し、再話して出版したことで知られている。そして、ジェイコブズが再話・出版した時代の前に、すでに『グリム童話』も『ノルウェーの昔話集』も英語訳が出版されて、高く評価されていたのである。

また、言語の入れ替え（翻訳）についても、ジェイコブズは反論している。スコットランド語から翻訳することについては「英語訛りのスコットランド語があり、スコットランド人は、同じ話を英語でも語る！」すなわち、ここでジェイコブズが主張したことは、翻訳すること自体が言語の置き換えであり、ここでは、ある言語（文化）を、違う言語の相当する言語（文化）に置き換えるわけで、それは一種の書き換え（再話）に相当するものである、と主張したのである。

さらに、同じ話が州の境を越えて異なる側で語られる場合に、元は同じ話であったのに、語られる場所が変われば違いが出ている事例があることを挙げ、また、同じ話が、別の地域で、その地域の方言で語られる場合には違いが出ていることを紹介している。同じような事例として、例えば、ヘンダーソン<sup>5</sup>やチェンバース<sup>6</sup>の話も英語で語られている事実を上げている。彼らはもともとケルト語で語られた話を英語で出版しているのである。こうして、ジェイコブズは、あらゆる人の手で「英語」に置き換えることが許されるのではないだろうか、と主張したのである。

ジェイコブズの主張はもともとであり、彼は、当時の民俗学者たちや専門誌の批評家が、フォークテールの源はどこか、と考察する際に「彼らは、一つの

話は、それが発見されたところに源を発すると考えておられるようだ。」と指摘している。それゆえ、彼らは「その話の発見された形がもっとも重要だと考えておられる。そして、その出生の場所を制限しておられる。」と、彼らの偏狭な思い込みを鋭く批判したのである。そうして、彼は「各話にはどこか他のところに原点があるという、可能性も考えられる。すなわち、ある場所で発見されたいかなる話も、そこで発生したというより、その場所に持ち込まれた、と考えるほうが妥当する度合いが高いと、私は考えている。」と述べている。その点に関して、彼はフェアリーテールが広く国を越えて移動し、各国に伝播した事例を調査してまとめ、「伝播の問題性」と題して関連の機関誌に詳しく報告している。<sup>7</sup>

こうして、ジェイコブズは自分の再話を批判した人々を論破したのであるが、さらに、その反論を立証するため、彼は、第一巻 *English Fairy Tales* を刊行した時と同様に、第二巻の巻末に詳細な学術的注を付している。その注に元話の出典先を掲載し、当時、欧米で彼の把握できた同じ話型の類話、異話などを紹介し、さらにその話型に対する自らの見解までも書き記している。したがって、我々は彼の学術的注を参考にし、その上で作品の内容や文体に刻まれた、具体的な事実を確かめることによって、彼のフェアリーテール集刊行の意図を探し求めていくことできると思われる。

## 2. ジェイコブズの再話の特質——再話材料の収集法と再話法



Arthur Rackham の「猫皮」より

筆者はこの論文で、グリム兄弟のメルヒェン集とジェイコブズのフェアリーテール集の内容、文体に、どのような共通性があるのか、そして、グリム兄弟や彼の仕事には、具体的にどのような特質があったのかを明らかにしたいと思っている。そこでこの章では、ジェイコブズが『続英国の昔話』を刊行するまでに、実際にどのような元話を選び、いかに再話していったかについて代表的な話を取り上げて記しておきたい。今回は八三番 *Catskin*「猫皮」という作品を用い

ることにする。その理由は、この物語は、第一章で挙げた、ジェイコブズの再話の特徴の1.「ある話を再話する際に、別の話から素材を取って、元話にその素材を挿入したり、元話のある部分を削ったりした。」及び4.「バラッド[韻文で語られた詩歌]を散文化して物語った。」という方法に相当する再話作業がなされているからである。つまり、この物語の再話過程を検証することから、ジェイコブズの再話の特質が明らかになると思われるからである。

昔話「猫皮」は話型としてはAT 510Bであり、いわゆる“Unnatural Love”型の昔話の一つである。ジェイコブズは、「猫皮」について、巻末にさまざまな注を付している。まず、出典については以下のように記している。

SOURCE From the chap-book reprinted in Halliwell I have introduced the demand for magic dresses from Chambers's *Rashie Coat*, into which it had clearly been interpolated from some version of *Catskin*.

つまり、ジェイコブズは、すでにハリウエル (James Orchard Halliwell) のフェアリーテール集 (*Nursery Rhymes and Nursery Tales of England*, Frederick Warne and Co., London, 1849.) に、チャックブックから取り入れられていた話 (Halliwell, pp. 10-14. 韻文で語られている。括弧内は筆者) を、彼の「猫皮」の物語の基盤としたのである。そして、チェンバース ((Robert Chambers) の *Rashie-coat* (Chambers, pp. 66-70.) の中の「魔法のドレスを要求するくだり」をその物語の前半部分に挿入した。その際、この「魔法のドレスを要求する部分」の出所を調査し、その別の版の物語がどのように書き改められているかも確認していたのであろう (なお、チャンバースは、物語の後ろに、以下のように添え書きしている。*Rashie-coat* seems to be the Scottish edition of the tale of *Cinderella*.)。

次に、ジェイコブズが「猫皮」の類話については、記したことを解説しておきたい。

PARALLELS Miss Cox's admirable volume of variants of *Cinderella* also contains seventy-three variants of *Catskin*, besides thirteen 'indeterminate' ones which approximate to that type. Of these eighty-six, five exist in the British Isles, two chap-books given in Halliwell and in Dixon's *Songs of English Peasantry*, two

by Campbell, Nos. xiv and xiva, 'The King who Wished to Marry his Daughter', and one by Kennedy's *Fireside Stories*, 'The Princess in the Catskins'. Goldsmith knew the story by the name of 'Catskin', as he refers to it in the Vicar. There is a fragment from Cornwall in *Folk-Lore*, i, App. p. 149.

すなわち、ジェイコブズの把握していた「猫皮」の類話は、コックスの編集した書物 (Cox, Marian Roalfe. *Cinderella: Three Hundred and Forty-five Variants of Cinderella, Catskin, and Cap O' Rushes, abstracted and tabulated*. London: David Nutt for the Folklore Society, 1893.) 中の八六話であり、少なくとも、彼はこれらの話の以下のものを詳細に調査したと思われる。なお、下記の物語は、現在、コックスの編集した書物 *Cinderella: Three Hundred and Forty-five Variants of Cinderella, Catskin, and Cap O' Rushes, abstracted and tabulated*. にすべて掲載されている。

- ・ブリテン諸島の五話
- ・ハリウェルの本の二話
- ・ディクソン (James Henry Dixon) の『イギリス農民の歌』に採録されたチャップブック二冊  
(*Ancient Poems, Ballads, and Songs of the Peasantry of England*, edited by Mr. James Henry Dixon)
- ・ジョン・フランシス・キャンベル (John Francis Campbell) の本の二話  
(*Popular Tales of the West Highlands*, 4 vols., 1860-62, Nos. xiv and xiva)
- ・パトリック・ケネディ (Kennedy, Patrick, 1801-1873) の『アイルランドの炉辺で語った物語集』の一話  
(*The fireside stories of Ireland*, Dublin: M'Glashan and Gill; London: Simpkin, Marshall : Burns, Oates; Edinburgh: J. Menzies, 1870)
- ・Folk-Lore の中の、コーンウォール地方から採集した話の断片。  
(*The Folk-Lore Society for Collecting and Printing Relics of Popular Antiquities, &c*, established in THE YEAR MDCCCLXXVIII. Publications of The Folk-Lore Society. I. App. p. 149)

なお、ジェイコブは類話の後に、備考欄を設け、Catskin に関する詳細な注を付しているが、この論考では、論点を主に彼の再話に関することに集中したいので、注に関する解説は、ここでは割愛する。

以上、述べてきたように、ジェイコブズは一つの物語を再話するに、基盤となる物語を探し出し、それが韻文で語られていれば、散文に書き直し、さらに、話の中に、他の類話から適切な挿話を探して挿入しているのである。元の原文を尊重することが重要とされた時代に、彼はなにゆえ、このような混合の物語を作り出したのであろうか。そこでこれまで述べた事実を基に、続いて、彼の意図を具体的に知るために、彼の再話した物語の特徴について、フェアリーテールの理論に照らして述べていくことにする。

### 3. ジェイコブズの再話の特徴と様式論

フェアリーテールの語り口に「繰り返し」が多いことは周知のことであるが、ジェイコブズの「猫皮」も幾重もの繰り返しの法則に則った物語である。そのことが、実はこの物語が好まれ、長く語り継がれている理由に深い関係があると思われる（その理由については後述したい）。

では、この物語の語りの様式について解説するため、先にこの物語のあらすじ（後の論証のために、全訳に近い形で掲載している部分もある。）を紹介し、次いで構造の分析をしておきたい。

#### 「猫皮」

あるところに、一人の身分のよい男がいて、財産を引き継ぐ息子が欲しいと思っていた。ところが生まれたのは娘で、この世に二人とないほどかわいい女の子であったが、男は赤ん坊には目もくれなかった。

女の子は一五になるまで、一度も父親に目をかけてもらえなかったが、美しく育ち、やがて嫁に行く年ごろになると、父親は「最初に申しこんだ男と結婚させてしまえ」と告げる。この話が知れわたり、一番先にやってきたのは、年取ったいやらしい荒くれ男であった。

娘は困って、鶏飼いのおかみさんのところへ相談に行く。おかみさんは「銀の着物をもらうまでは嫌だといっておやり」と、助言する。娘がそういうと、すぐに銀の着物が届けられる。同じことが起り、鶏飼いのおかみさんは「金の着物



をもらうまでは嫌だといっておやり」と、助言する。娘がそういうと、すぐに金の着物が届けられる。また同じことが起こり、鶏飼いのおかみさんは、「空を飛ぶ鳥という鳥の羽でつくった着物をもらうまでは嫌だといっておやり」と、助言する。そこで、その男の手下は豆を山ほど使って、空を飛ぶ鳥という鳥に向かって「どの鳥も、豆を一つぶひろって、羽を一枚おいていけ！」と叫ぶ。すると、どの鳥も豆を一つぶ拾い、羽を一枚ずつおいていき、その羽で着物がつくれ、娘に届けられる。娘は、もう一度鶏飼いのおかみさんに助けを求め、「結婚するのなら、その前に猫の皮の着物をつくってくださいといっておやり」と、助言される。娘は猫の皮の着物が届けられると、それを身につけ、他の着物をまとめて森へ逃げこむ。以上が、この物語の前半である。中間部は以下である。

娘が、森のはずれまでやってくると、立派なお城が見える。娘は美しい着物を森の中に隠し、お城に行き、仕事を求める。

城の奥方は「皿洗いでも構わないなら」といって、娘を雇ってくれる。娘は皿洗いとして働くことになるが、着ているもののせいで、「猫皮」とよばれる。料理番の女は、娘にたいへんつらく当たり、娘の暮らしは惨めであった。

この城の若い主が旅から帰ってくることになり、盛大な舞踏会が開かれることになる。召使いたちがその話をしていると、猫皮が料理番に「わたしも行ってみたい」という。料理番は「この薄汚い、あつかましい小娘、その汚らしい猫皮をかぶって、ご立派な殿方や、奥方さまのいらっしゃるところへ出て行こうっていうのかい？ ふん、さぞかし目立つことだろうよ！」といって、水の入った洗い桶を取り上げ、猫皮の顔にぶちまける。しかし、猫皮はプルプルッと耳をふっただけで、何もいわなかった。

舞踏会の日、猫皮は台所を抜け出し、滝の水でからだを洗い、隠しておいた銀の着物を出して身につけ、舞踏会へと急ぐ。娘が広間に入っていくと、みな、その顔かたちの美しさと、立居振舞のしとやかさに圧倒される。城の若主人もたちまち娘に心を奪われ、長い夜の間、他の誰とも踊ろうとせず、別れのときがくると、尋ねる。「美しい娘さん、あなたのお住まいをどうかお教え下さい。」

娘は、以下のように答える。

「私は、『桶の水』という看板の出ている宿屋に住んでいます。」

娘はお城を飛び出し、また猫皮の着物を着て、そっと皿洗い場へ戻る。幸い、料理番には気づかれずにすむ。

次の朝、若い城主は、母君のところへ行って、きっぱりという。

「銀の着物の姫以外とは、誰とも結婚しない。」

次の舞踏会が開かれることになり、猫皮は料理番に「私も行ってみたい」という。料理番は「この薄汚い、あつかましい小娘、ご立派な殿方や奥方さまの中で、おまえは、さぞかし目立つことだろうよ!」といって、柄杓<sup>8</sup>を振り上げ、猫皮の背中を叩く。しかし、猫皮は耳をふっただけだった。

猫皮は、台所から逃げ出し、滝の水でからだを洗い、隠しておいた金の着物を身につけ、舞踏会へかけつける。娘が入って行くと、お客たちの目は、いっせいに娘に注がれる。若い主人も、すぐに「桶の水」のお姫さまだとわかり、娘の手を取り、最後まで離さない。最後の踊りのとき、若い主人は、また娘にどこに住んでいるのかと尋ねる。娘は答える。

「私は、『折れた柄杓』という看板の出ている宿屋に住んでいます。」

娘は身をひるがえし、金の着物を脱ぎ、また猫皮の着物を着て、そっと皿洗い場へ戻る。

次の日、若い城主は、「桶の水」や「折れた柄杓」という看板の宿屋はないかと探すが、見つけることができず、母君に、もう一度舞踏会を開いてくれるように頼む。

何もかも前と同じことが起こる。猫皮は、料理番に「舞踏会に行きたい」という。料理番は「この薄汚い小娘」とどなって、穴あき杓子<sup>9</sup>を振り上げ、猫皮の頭を叩く。しかし、猫皮は耳をふっただけだった。

猫皮は森へ行き、泉の水でからだを洗い、鳥の羽の着物を身につけ、舞踏会にかけつける。娘が入って行くと、みな、娘の姿かたちの美しいのと、着ているものの豪華でめずらしいのに驚く。若い主人は、すぐに、それが自分の恋しい人だとわかり、一晩中、他の誰とも踊らない。舞踏会の終わりに、若主人は、娘にどこに住んでいるのかと尋ねる。娘は、答える。

「私は、『破れた穴あき杓子』という看板の出ている宿屋に住んでいます。」

娘は、森へ逃げ帰るが、若い主人は後をつけていき、娘が羽の若物を脱いで、猫皮の着物に着がえるところを見てしまい、この娘が自分の城の皿洗い女中だということを知る。

次の日、若主人は母君のところへ行き、皿洗いの「猫皮」と結婚したい、と告げるが、母君は拒絶する。若い主人は、悲しみのあまり床につき、重い病気になる。医者は手を尽くすが若主人は、どんな薬も、猫皮の手からでなければ飲もうとしない。そこで医者が奥方に、猫皮との結婚を許さなければ、ご子息さまは死んでしまう、と告げると、母君も祈れるしかなく、猫皮を呼びにやる。猫皮が金の着物を着て現れ、母君は美しい娘との結婚を許す。こうして、二人は結婚する。

物語は、以下のように閉じられる。



J. D. Batten の「猫皮」より

やがて、男の子が生まれ、その子が四つになったある日、子どもを抱いた、一人の物乞いの女が戸口に現れる。奥方になった猫皮が、息子にお金を持たせると、息子は女ではなく、抱かれている子どもにそれを握らせる。この様子を見た、意地の悪い料理番のばあさんがいう。

「見てごらん、やっぱり物乞いの子は物乞いの子同士、気が合うんだねえ！」

このことばに猫皮は傷つき、夫に父親のことを何もかも話し、自分のふた親を見に行くように頼む。

二人は、森を通り抜け、猫皮の父親の屋敷まで行く。夫は猫皮を宿屋に残し、父親に会う。

父親は、あれから一人の子どもも授からず、妻にも先立たれて、今やこの世に一人きり、毎日、ふさ

ぎこんで暮らしている。若い夫は老人に尋ねる。「あなたには娘さんが一人おありではなかったでしょうか。むかし、顔も見たくない、自分の娘でもないとおっしゃっていたようですが。」老人は答える。「その通りじゃ。わしは頑な罪人じゃ。だが、死ぬ前に、ひと目あの子に会いたい。それさえできれば、わしの財産などみなくれてやる。」若い城主は、猫皮の身に起こったことを話し、父親を宿屋に連れて行く。それから三人はそろって城に帰り、いつまでも幸せに暮らした。

#### 4. 「猫皮」の構造分析

この物語の構造を抽象化して示すと、以下のようになる。始まりと終わりの外枠は、主人公の猫皮ではなく、父親の状況が語られている。つまり、この父親は跡取り息子がおらず（**困った状態 1**）、息子を欲しいと思っていたが、生れたのは娘であったので娘を蔑ろにする。整った形として、この昔話が完結するには、子どもを愛せない父親が子どもを愛するようにならねばならない（**課題A**）。最終的には、父親は息子を与えられず（**困った状態 1 解決しない**）、しかし最後に娘を愛するようになる（**課題Aの達成**）。娘の立場からいえば、父親に愛されず、家を出るはめになり、最後に父親に愛される、という幸せな結末（**和解**）を迎えて終わっている。

**困った状態1** (父親にとって) 跡取りの息子がいない。

**課題A** 子どもを愛せない父親が、子どもを愛するようになること。

(⇒娘が父親に愛してもらえるようになる。)

**困った状態1 解決しない。** 結局、息子は生まれなかった。

**課題Aの達成** 父親が子どもを愛するようになった。

親子が互いに愛し合うようになった。父親は懺悔し後悔している。

(⇒娘が父親に愛してもらえるようになった。和解で終わる。)

物語の前半部分は、娘の行為を追うことによって読み取ることができる。すなわち、嫌な相手と結婚させられそうになり (**困った状態 2**)、娘には、二つの課題がある。一つは差し迫った危機 (**困った状況**) から逃れること (**課題B**) と、もう一つはふさわしい結婚相手を見つけて結婚すること (**課題C**) である。娘は、前半で困った状況から逃れ (**困った状態 2 解消**) し、課題Bを解消する (**課題Bの達成**)。そして、物語の後半で、ふさわしい結婚相手を見つけて結婚する (**課題Cの達成**)。その間に、娘は結婚を申し込んできた嫌な相手に、難題を与え (**難題1、2、3**)、三回とも達成されてしまう (**難題1、2、3を達成**)。これは逃れるための時間稼ぎのような状況である。その際、鶏飼いのおかみさんが三回援助している (**援助1、2、3**)。実際には、結婚を申し込んできた相手から逃れるために、四回、難題を与えて、四回とも達成されるのであるが、難題1、2、3は銀の着物、金の着物、鳥の羽の着物で、高い価値のある品物である。そして、四回目は猫皮で、これは着飾るための着物ではなく、身を隠すための道具としての着物である。そして、逃走する (家から出発)。

**困った状態2** (娘にとって) 嫌な相手との結婚。

**課題B** 困った状況から逃れる。

**課題C** ふさわしい結婚相手を見つけて結婚すること。

**援助1**

**難題1** 結婚を申し込んだ相手に (銀の着物) を要求

**難題1** を達成されてしまう

## 援助2

**難題2** 結婚を申し込んだ相手に（金の着物）を要求

**難題2**を達成されてしまう

## 援助3

**難題3** 結婚を申し込んだ相手に（鳥の羽の着物）を要求

**難題3**を達成されてしまう

## 援助4

**難題4** 結婚を申し込んだ相手に（猫皮）を要求

**難題4**を達成させる

## 逃走（家から出発）

### 困った状態2 解消

**課題Bの達成** 嫌な相手との結婚から逃れた。

**課題Cの達成** ふさわしい結婚相手を見つけて結婚した。

物語の後半は、娘がお城の若主人と出会い、結婚するまでを語っている。まずは変身の道具（三枚の着物）を隠し（隠蔽）、自分は猫皮で身を隠す。娘はお城で生きていくために職を得る（**試練1－試練1の克服**）。そして、お城の職場ではいじめが始まる。舞踏会の告知がされると、出席したいという娘に対し、いじめは三回の暴力で示されている（**手荒い行為1、2、3**）。また、娘は三回、舞踏会に出席するが、これを若い主人の心をつかむための行為（**試験1、2、3**）とすると、娘は見事にその行為をやったのける（**試験1、2、3に合格**）。その際、三回の変身（**変身1、2、3**）を行っている。城の主人の側から読み取ると、主人は、正体を突き止めるために問い質し（**問1、2、3**）、答えをもらっている（**答1、2、3**）。三回目の答の後、主人は娘の後をつけ、正体を知る（**正体暴露**）。その間、第一回目の舞踏会と第二回目の舞踏会の後に、主人は娘と再会する（結婚する）ために、母君に舞踏会を開催するように願い出て（**課題D1、D2**）、承諾を得て舞踏会を開いてもらっている（**課題D1、D2の達成**）。そして、若主人は娘（猫皮）と結婚したいと申し出、娘が猫皮を脱ぎ棄て、金の着物を着て（**変身4**）登場する。そこで猫皮は正体を明かし（**正体露見**）、主人は母君の承諾を得て、娘と結婚する。以上が、この物語の構造である。こうして見ると、この物語が幾重もの「繰り返し」を用いて語られていることがわかる。そこで次章

では、この物語でいかに「繰り返し」を用いているかを検討したい。

### 隠蔽 変身するための道具を隠す

試練1 一人で生きていくための手段を手に入れる。

試練1の克服 お城で職を得る。

いじめが始まる。

### 舞踏会の告知

いじめ 手荒い行為1

試験1 **変身1** - 試験1に合格

問1 (正体を突き止める) - 答1

課題D1 娘と再会すること。

いじめ 手荒い行為2

試験2 **変身2** - 試験2に合格

課題D1の達成 娘と再会する。

問2 (正体を突き止める) - 答2

課題D2 娘と再会すること。

いじめ 手荒い行為3

試験3 **変身3** - 試験3に合格

課題D2の達成 娘と再会する。

問3 (正体を突き止める) - 答3 (正体が暴露される)

**変身4**

(正体を露見する)

## 5. グリムとジェイコブズの再話手法 (1) - 「繰り返し」と「純化作用」

ここでは、グリムの「繰り返し」の手法、及び「実態的に語らない、図形的に語る」という手法を参考に、ジェイコブズが「猫皮」に用いた同じ再話法について論じたい。

小澤俊夫は論文「ヴィルヘルム・グリムの再話法」<sup>10</sup>の中で、口伝えのメルヒェンとしての様式について論じている。小澤は「グリム兄弟、特にヴィルヘルム・グリムが口伝えのメルヒェンの様式をいかに理解し、再話に際して実現していたか」を考察し、「ヴィルヘルムのメルヒェンの再話法には様々な点での

工夫が見られる」と述べている。小澤はこの論考に先だって、ヴィルヘルムが先行する昔話集から話を採用した際、どの様に手を加えて自らのメルヒェン集に収めたかをいくつかの実例について発表しているが、「天国の仕立屋」という話については、グリムは一六世紀前半に書かれたイェルク・ヴィクラムの『乳母車の本』からと、同じく一六世紀半ばのヤーコプ・フライによる『庭園の集い』からの話を合成して作り上げている、と述べている。このように、二つの話を合成して一つの物語を作成したことは、ジェイコブズが「猫皮」を作り上げるに際して行ったことと同じである。

小澤は、グリム童話の実例として「白雪姫」をとりあげ、白雪姫が悪い継母によって毒殺される場面を検討している。白雪姫は継母に三回殺害されるが、その語り口は、

一回目は「行商人が、すばやく、力いっぱいきつくしめたので、白雪姫は、息ができなくなり、死んだようになってたおれてしまいました」となっており、窒息死しかけていた彼女を、夕方帰ってきたこびとたちが、「ひもを、まっぶたつに切りました。すると、白雪姫は、かすかに息をしはじめ、だんだんに生きかえてきました」とされている。小澤は、「白雪姫が窒息して死んだようになっていたが……生きかえてくる。つまり、窒息はしていなかったことになる。」と述べ、「ここでは窒息が問題なのではなくて、白雪姫の美しい姿をひもがじゃましていた。そのじゃまなひもを切り落としたりもとの形が回復した。それで命がよみがえった、ということになっている……白雪姫の窒息という生理現象が語られているのではなく、図形としての白雪姫の美しい姿がひもによってじゃまされていた。そのじゃまなひもを切りとったらもとの美しい図形がよみがえり、生命がよみがえったという語り方であるということがわかる。」と論じている。

二回目は「年とった女が「あんたのかみをくしけずってあげよう」と言って、「くしを白雪姫のかみの毛、深くさしました。すると、たちまち、毒がはげしくきいて、白雪姫はたおれて死んでしまいました」となっている。ところが毒殺されたはずの白雪姫なのに、「夕方になって、七人のこびとがうちへ帰ってきました。……そして、あちこちさがして、毒のくしを見つけました。そのくしをぬきとってやると、白雪姫は、気がつき、きょうの

できごとを話してきかせました」と語られている。小澤は、「ここでも毒の化学性はまったく問題にされず、白雪姫の美しい図形をくしが妨害していた。その図形をこわしているくしを取って、もとの美しい図形が回復されると命がよみがえるという語り方をされていることがわかる。つまり、毒の化学性はまったく問題にされていないのである。」と論じている。

三回目は「白雪姫は、お百姓のおばさんがさし出したリングを「ひとくち食べると、床にたおれて死んでしまいました」と語られている。つまり毒がきいて死んだものと思われる。……夕方になってこびとたちが家へ帰ってくる。ところが、こびとたちは白雪姫のからだのどこからも毒のものを見つけることができない。つまり、コルセットのひもをゆるめ、かみの毛をくしけずってみても発見できないし、からだを水とワインで洗ってみても毒を取り去ることができない。」そして、物語の終わり近くで、王子が白雪姫をこびとたちから貫い受ける場面では、「毒を飲みこんだまま死んでいる白雪姫の「ひつぎをかつがせて、歩きはじめました。すると、召使いたちが、やぶにあしをとられてよろめきました。そのひょうしに、白雪姫が飲みこんでいた、毒のリングのひときれが、のどからとびだしました。そして、白雪姫は生きかえり、身を起こしました」と語られている。「ここでも毒の化学性は問題にされていない。白雪姫が死んだのは、のどに毒のリングがひっかかっていたからであり、そのリングが飛び出せば命は生きかえるというのである。つまり、ここでも前二回と同様、のどを図形的にじゃましていたリングが除かれて、もとの図形が回復すれば、命がよみがえるという語り方であることがわかる。」と結論づけている。

長い引用になったが、ここで小澤が述べていることは、ヴィルヘルムが、白雪姫のこの場面について、口伝え昔話として基本的に重要な性質を敏感に感じとって実現していることがわかる……、窒息という生理現象や毒の化学性という「実態を語る」のではなくて「図形としての白雪姫」を「他のものが図形」として妨害している。そのために命が失われたのを、その妨害を除くことによって命を回復させる、という語り方をしているという点である。

では、続いて、ジェイコブズの「猫皮」の語り口をみてみたい。ここでは原文で引用し、考察していきたい。引用する部分は、主人公の娘がいじめを受け



る部分である。

### 一回目

‘Dear me, Mrs Cook,’ said Catskin, ‘how much I should like to go.’

‘What! you dirty impudent slut,’ said the cook, ‘you go among all the fine lords and ladies with your filthy catskin? A fine figure you’d cut!’ and with that she took a basin of water and dashed it into Catskin’s face. But she only briskly shook her ears, and said nothing.

When the day of the ball arrived Catskin slipped out of the house and went to the edge of the forest, where she had hidden her dresses. So she bathed herself in a crystal waterfall, and then put on her coat of silver cloth, and hastened away to the ball.

### 二回目

‘Oh, how I should like to go!’

Whereupon the cook screamed out in a rage,

‘What, you, you dirty impudent slut! You would cut a fine figure among all the fine lords and ladies.’ And with that she up with a ladle and broke it across Catskin’s back. But she only shook her ears, and ran off to the forest, where she first of all bathed, and then put on her coat of beaten gold, and off she went to the ballroom.

### 三回目

Catskin told the cook how much she would like to go to the ball, the cook called her ‘a dirty slut’, and broke the skimmer across her head. But she only shook her ears, and went off to the forest, where she first bathed in the crystal spring, and then donned her coat of feathers, and so off to the ballroom.

下線部分のみを訳すと、以下ようになる。

一回目は、「料理番は水の入った洗い桶を取り上げ、猫皮の顔にぶちまけた。しかし、猫皮はプルプルッと耳をふっただけで、何もいわなかった。」

二回目は、「料理番は柄杓を振り上げ、猫皮の背中を叩いた。しかし、猫皮は耳をふっただけだった。」

三回目は、「料理番は穴あき杓子を振り上げ、猫皮の頭を叩いた。しかし、猫皮は耳をふっただけだった。」

さて先に紹介したように、ジェイコブズは、ハリウエルのフェアリーテール集に、チャックブックから取り入れられていた話 (Halliwell, pp. 10-14. 韻文で語られている。) を、彼の「猫皮」の物語の基盤としたのであるが、ハリウエルの物語の、料理番と娘のやり取りの場面は以下のように語られている。

<p>1. A basin of water she took, And dash'd in poor Catskin's face ; But briskly her ears she shook, And went to her hiding-place.</p>	<p>1. 彼女は水の入った桶を持ち上げて、かわいそうに、猫皮の顔にぶちまけた。しかし、彼女は耳をびくっと動かし、隠している場所に行った。</p>
<p>She washed every stain from her skin, In some crystal waterfall ; Then put on a beautiful dress, And hasted away to the ball.</p>	<p>彼女は皮膚についた汚れをすべて洗い落した。 水晶のような滝の水で。 それから、美しいドレスを身につけて、舞踏会場へと急いだ。</p>
<p>2. In a rage the ladle she took, And broke poor Catskin's head ; But off she went shaking her ears. And swift to her forest she fled.</p>	<p>2. 怒りに任せて、彼女は柄杓を持ちあげ、かわいそうに、猫皮の頭を叩いた。しかし、彼女は耳を小刻みに動かしながら、走り去り、すばやく森に逃げて行った。</p>
<p>She washed every blood-stain off In some crystal waterfall ; Put on a more beautiful dress, And hasted away to the ball.</p>	<p>彼女は血をすべて洗い落した。 水晶のような滝の水で。 それから、さらに美しいドレスを身につけて、舞踏会場へと急いだ。</p>
<p>3. In a fury she took the skimmer, And broke poor Catskin's head ; But heart-whole and lively as ever. Away to her forest she fled.</p>	<p>3. 激怒して、彼女は穴あき杓子を持ちあげ、かわいそうに、猫皮の頭を叩いた。しかし、彼女は気落ちせず、前のように元気いっぱい、彼女から離れて、森に逃げて行った。</p>

She washed the stains of blood In some crystal waterfall; Then put on her most beautiful dress, And hasted away to the ball.	彼女は血痕を洗い落した。 水晶のような滝の水で。 それから、一番美しいドレスを身につけて、 舞踏会場へと急いだ。
---	---

ジェイコブズの語り口は、ハリウエルの語り口と明らかに違う。ジェイコブズはハリウエルの韻文の物語を基にして物語を散文で語ったのであるが、この部分では、いくつかの変更点を見出すことができる。一点は、ハリウエル版では、猫皮が（一回目に料理番のおかみさんから顔に水をかけられた後）、二回目以降、叩かれる箇所は「頭」のみである。しかし、ジェイコブズ版では、二回目は「背中」、三回目が「頭」と変更されている。この変更は何を意味するのだろうか。

ところで、ハリウエル版では、娘がお城の台所の皿洗いとして働き始めるとすぐに、以下のような記述がある。

So Catskin was under the cook, A very sad life she led,  
For often a ladle she took. And broke poor Catskin's head.

すなわち、「台所の料理人に、しばしば柄杓で頭を叩かれていた」と書かれている。この行為はいじめの常套手段であったと読み取れる。しかし、ジェイコブズ版では、舞踏会に行きたいと申し出た二回目に、初めて「柄杓で背中を叩かれた」となっている。このような語り方は、登場者の行為が迫り上げられていき、聞き手を引き込んでいく手法である。ジェイコブズ「猫皮」でのいじめは「水を顔にかける」→「背中を叩く」→「頭を叩く」と、だんだんひどくなる。受ける暴力行為の危険度を増し、激しくなっていくように語られている。これは、音楽でクレシェンドして盛り上げていく手法に似ている。ジェイコブズは他の話でも、この「迫り上げ」の手法を用いている。例えば、*English Fairy Tales* の「モリー・ウァッピー」(Molly Whuppie) で、この盛り上げていく手法が効果的に用いられている。この物語は、三人姉妹が両親に森で捨てられ、大男の家に行って捕まる。しかし末っ子のモリーが知恵を使って、三人は逃げ延びる。その後、お城に逃げ込み、そこの王さまにいわれて、再び、モリーが大男の家

に、三度、価値のある品物を盗みに戻るのであるが、その場面を見てみよう。

一回目

He said: 'Well, Molly, you are a clever girl, and you have managed well; but, if you would manage better, and go back, and steal the giant's sword that hangs on the back of his bed, I would give your eldest sister my eldest son to marry.'

Molly said she would try.

二回目

Well, the king he says: 'Ye've managed well, Molly; but if ye would manage better, and steal the purse that lies below the giant's pillow, I would marry your second sister to my second son.' And Molly said she would try.

三回目

After that the king says to Molly: 'Molly, you are a clever girl, but if you would do better yet, and steal the giant's ring that he wears on his finger, I will give you my youngest son for yourself.' Molly said she would try. (下線部は筆者)

一回目 大男のベッドの後ろに吊ってある 剣を盗み出して来い。

二回目 大男の枕の下にある 財布を盗み出し来い。

三回目 大男が指にはめている 指輪を盗み出し来い。

王さまから盗み出すように言われた品物のある場所と品物とが、盗み出すに、だんだん難易度を増すのである。つまり、品物のある場所が「大男のベッドの後ろ」→「枕の下」→「指にはめている」と、だんだん身近になっていき、また品物が小さくなって盗み出しにくくなるのである。事実、盗み出す場面は以下のように語られている。

一回目

So she went back, and managed to slip into the giant's house, and crept in below the bed. The giant came home, and ate up a great supper, and went to bed. Molly waited until he was snoring, and she crept out, and reached over the giant and got down the sword; but just as she got it out over the bed it gave a rattle, and up jumped the giant, and Molly ran out at the door and the sword with her; and she ran, and he ran, till they came to the Bridge of one hair; and

she got over, ... So Molly took the sword to the king, and her sister was married to his son.

## 二回目

So she set out for the giant's house, and slipped in, and hid again below the bed, and waited till the giant had eaten his supper, and was snoring sound asleep. She slipped out and slipped her hand below the pillow, and got out the purse; but just as she was going out the giant wakened, and ran after her; and she ran, and he ran, till they came to the Bridge of one hair, and she got over, ... So Molly took the purse to the king, and her second sister was married to the king's second son.

## 三回目

So back she goes to the giant's house, and hides herself below the bed. The giant wasn't long er he came home, and, after he had eaten a great big supper, he went to his bed, and shortly was snoring loud. Molly crept out and reached over the bed, and got hold of the giant's hand, and she pulled and she pulled until she got off the ring; but just as she got it off the giant got up, and gripped her by the hand (下線部は筆者)

上記のように、回数が進むたびに、盗み出す時の見つかる危険度が増し、結局モリーは大男に捕まってしまう。この語り口は見事な「迫り上げ」であり、聞き手は語り口に引き込まれてだんだん緊張していく。このようにジェイコブズの語り口には工夫があり、この語り口はグリムの「白雪姫」の殺害の際の語り口に似ているといえよう。すなわち、グリムの用いた殺害の仕方は、「ひもで胸を締め付けて窒息させて殺す」→「毒のくしを髪の毛に差し込んで殺す」→「毒のリングを食べさせて殺す」と、身体の外側から締める → 身体の内側に入れる → 身体の中に入れる、と迫り上げているのであった。

論点を「猫皮」の語り口に戻すが、次に、ジェイコブズもグリムの「実態的に語らない、図形的に語る」という手法を用いていることを述べたい。先のハリウエルの元の語り口では、猫皮は二回目に柄杓で頭を叩かれて、血が出ている。そのため、彼女は滝の水で血をすべて洗い落として舞踏会で行き、三回目では、穴あき杓子で頭を叩かれて、血が出ている。そのため、彼女は滝の水で

血痕を洗い落している。ところが、ジェイコブズ版では、猫皮は、一回目は、「料理番は水の入った洗い桶を取り上げて、猫皮の顔にぶちまけた。しかし、猫皮はブルブルッと耳をふっただけで、何もいわなかった。」二回目は、「料理番は柄杓を振り上げて、猫皮の背中を叩いた。しかし、猫皮は耳をふっただけだった。」三回目は、「料理番は穴あき杓子を振り上げて、猫皮の頭を叩いた。しかし、猫皮は耳をふっただけだった。」となっている。ジェイコブズ版では、主人公はただ叩かれたという事実のみが語られ、血を流さず、また血が出ないため、血を洗い落とす必要もなく、その場面は削除されている。フェアリーテールの語り口は本来こうあるべきで、残酷な事実は語るが、リアルに克明には語らないのである。このような語り口を、マックス・リュティは『ヨーロッパの昔話』の中で「純化作用」あるいは「中身を抜いて語る」(リュティ 120) と称している。いわゆるフェアリーテールの抽象的な語りの様式であり、先に述べた「実態的に語らない、図形的に語る」という手法である。グリムは一九世紀前半において、すでにフェアリーテールの語りの特性を感じ取って、こうした再話を実現したが、ジェイコブズも、一九世紀の末期に、フェアリーテールの語りの特性を活かして、ハリウエル版から再話したのであった。

ハリウエルの写実的で、激しい場面の設定、そして生々しい表現の語り口は、確かに場面の演出としては効果的であった。しかし彼の物語はその後、廃れてしまった。おそらく現代では資料集の一部に掲載されているにすぎない。つまり、ハリウエルの語り口は必ずしもその物語の寿命を長く保障するものではなかった。しかし、ジェイコブズの質素で、整った語り口は、一一七年を経た現在も、なお生き続け、しかも広く世界中で愛読されているのである。すなわち、グリムの物語と同様に、ジェイコブズの物語は、内容も子どもにふさわしく、また文体も分かりやすく、長く読み継がれているのである。

続いて、視点を変え、ジェイコブズ版の工夫の、もう一つの手法を述べてみたい。それはフェアリーテールの「先取り」という手法である。

## 6. グリムとジェイコブズの再話手法 (2) — 「先取り」

昔話が子どもに好まれ、また聞いてわかりやすいということは、経験的に誰もが認めることであるが、単に「おはなし」がおもしろいからだけではなく、

その文体に、子どもを楽しませ惹きつける、さまざまな要素があることがわかっている。そこでここでは、ジェイコブズの再話文体に表現されている、子ども読者に理解しやすい語りの手法「先取り」について述べてみたい。

長い年月、子どもたちと読書文庫活動を行い、また子どもと一緒に昔話を楽しんでおられる方々は、子どもがいかにか昔話を楽しみ受け入れているかを、実践の場からよくご存知である。例えば、東京子ども図書館の松岡享子氏は自ら語り手でもあるが、長い間、全国の多くの子ども文庫を支援され、昔話を語る人が増えるように尽力されている。そして昔話を語り、また楽しむために、さまざまな場で有意義な発言もなさっている。例えば、「先取り」の手法については以下のように述べている。

先取りというのは、物語の進んでいく方向を示し、聞き手に、前以ってこの先何が起こるかを教えておくやり方をいいます。昔話では、それが物語自体の中に巧みに織り込まれ、聞き手は、それと気づかずに、常に物語の進展する先を察知するように誘導されています。<sup>11</sup>

松岡氏は、ドイツ生まれの心理学者であったCharlotte Bühler (シャルロテ・ビューラー 1893-1974)<sup>12</sup>の著書「昔話と子どもの空想」を参考に、昔話によく見られるこの技法を紹介し、「先取り」は「聞き手にある種の見取り図を提示し、筋の展開を理解しやすくするもの」と述べ、先取りが効果的に用いられる例として、次の四つを挙げている。そして、説明のためにグリムの昔話を挙げています。

- 一、予言 「いばら姫」「死に神の名付け親」など
- 二、約束と誓い 「カエルの王さま」「ルンベルシュティルッヘン」など
- 三、警告と禁止 「オオカミと七匹の子ヤギ」「ラプンツェル」など
- 四、課題と命令 「ホレおばさん」「灰かぶり」など

ここで「先取り」を理解するために、松岡氏の解説から一例を紹介すると、

「いばら姫」を例にとると、冒頭、子どもがほしいといい暮している王と王妃に、ある日カエルが「一年たったらむすめどが生まれますぞ」と、予言します。この予言により聞き手の注意は、それが実現するか否かに向け

られるわけですが、もちろん予言は成就し、愛らしい王女が生まれます。

王は盛大な祝いの宴を準備し、王女によい運をさずけてもらおうとうらない女たちを招きます。しかし、金の皿が十二枚しかなかったため、十三人いたうらない女たちのひとは招かれませんでした。そのことをうらみに思った十三番目のうらない女は、「ひめは十五になったら、つむにさされて倒れて死ぬ」と予言します。この予言にだれもかれもおののきますが、まだ贈り物(予言)をしていなかった十二番目のうらない女が、それをやわらげて、死ぬのではなく百年の眠りにおちるのだと予言します。

このように「いばら姫」の物語は、予言を軸に展開します。予言がなされる都度、私たちの関心は予言の示す方向へ向けられ、その成就への期待、不安、怖れなどの緊張が生まれます。予言は、こうして聞き手の注意を物語の進展へ導く技法として作用します。

この「予言」(あるいは「予告」)は、「猫皮」でも有効に用いられている。「猫皮」では、物語の冒頭で、主人公が生まれた時、「父親は赤ん坊には目もくれなかった。」「父親は最初に申しこんだ男と結婚させてしまえと、告げる。」と語られ、聞き手は気の毒な主人公の身の上を案じる。さらに、「一番先にやってきたのは、年取ったいやらしい荒くれ男であった。」という語りを聞いて、聞き手は、主人公がその男との結婚から逃れられるように願い、できればふさわしい相手と出会って、幸せな結婚ができればと願う。そうして、この物語はその実現に向かって聞き手に不安と期待を感じさせながら、展開されていくのである。また、先に紹介した「モリー・ウッピー」では、子だくさんの夫婦が、口べらしのため、下の三人の娘を森の中へ捨てるところから物語は始まる。聞き手は主人公に同情し、物語へ没入しやすくなっている。

上記の四項目以外にも、「先取り」としては「援助(助言)」、「贈り物」という手法がある。松岡氏は以下のように述べている。

贈り物もそうです。日本の昔話「三枚のお札」では、和尚さんがひとりで山へはいる小僧に、鬼婆が出ると警告するだけでなく、まさかのときのためにとお札を三枚わたします。聞き手の興味は当然鬼婆の出現と、お札の果たす役割に向けられます。ロシアの昔話「美しいワシリーサとババヤ



ガー」では、母親が形見にと八歳の娘に人形をのこします。この人形が、その先物語の中でどのような働きを見せるかに聞き手の関心が寄せられます。

「猫皮」では、主人公の娘が嫌な相手から結婚を迫られ、「困った状況から」逃れるため、鶏飼いのおかみさんのところへ相談に行く。そこで、おかみさんの「援助（助言）」によって救われるのであるが、このことばによる援助は、話の主人公へのアドバイスであると同時に、話の聞き手に対しては、これから起こることを前以って逐一教えてくれる「予告」でもある。

続いて、娘は「銀の着物」、「金の着物」、「鳥の羽の着物」、「猫皮」を与えられることになり、それらの「贈り物」を持って家から逃走する。聞き手の関心は、当然、ふさわしい結婚相手の登場と、これらの品物の果たす役割に向けられる。三種類の着物は、娘の「顔かたちの美しさ」と、「立居振舞のしとやかさ」を引き立てる役割を果たし、猫皮は反対に、娘の「顔かたちの美しさ」と、「立居振舞のしとやかさ」を隠す役割を果たす。ここでも、ジェイコブズは、娘がいかに美しく、どのようにしとやかであるかを具体的には語っていない。「実態的に語らず、図形的に語っている」のである。娘は不思議な着物を身に付けたら変身するのである。贈り物の着物は、まさに魔法の力を備える呪物のように描かれている。このように、娘は「不思議な着物」を着ると称賛され、「猫皮」を着るといじめられる。

物語の後半では、「警告（あるいは禁止）」という手法が用いられている。お城で暮らすことになった主人公の娘は、舞踏会に行くことを望む。しかし、料理番の女は、彼女を叱りつける。これは物語ではいじめの場面として機能しているが、イギリスは元来階級社会なのであり、現実の社会では台所の下働きの娘がお城の舞踏会に参加することは不可能なことである。それゆえ、料理番は常識的に判断して、一種の「警告（あるいは禁止）」をしているのである。フェアリーテールでは、よく警告と禁止が行われ、しかし登場者は、通常そのルールを無視して行動することが多い。松岡氏は、この手法も以下のように述べている。

「オオカミと七匹の子ヤギ」における警告と禁止に至っては、先取りとい

う点で徹底しています。おかあさんヤギは、出かける前、子どもたちに、オオカミに気をつけるようにと警告するだけでなく、そのオオカミは声がしゃがれていることと足の黒いことで見分けがつくと教えています。これだけしっかりと話の先を示されれば、子ヤギたち同様、聞き手も、母親の出かけたあと、だれかが戸をたたいて、しゃがれ声で「あけておくれ、おかあさんだよ」というのを聞くと、オオカミだとすぐ見抜きます。しかも、このとき、聞き手は、それがおかあさんヤギの警告による話の先取りの結果だとは思わず、あたかも自分の予想が当たったような快感をおぼえるのです。

幼い子どもは、大人から警告を受けたり、なにかを禁止されたり、命令されたりすることが多いので、こうした先取りは、とくに子どもにとっては身近に感じられます。してはいけないと禁止されたとたん、それをしてみたいくなるという心の動きも、子どもにとっては十分共感できるものです。日本の昔話でも「みるなの座敷」「鶴女房」「瓜こ姫とあまんじやく」など、すべて禁止された行為を破ることが、物語を次の段階へ進ませています。

「猫皮」では、娘が三度の警告（禁止）を無視して、三度、舞踏会に行く。この間、聞き手は娘が禁止された行為を破ってお城へ行くたびに、ふさわしい結婚相手との出会いを期待する。そして、娘が美しい着物を身につけるごとに、先取りして、幸せな結末を予想するのである。

またこの物語では、「問」-「答」という先取りの手法も用いられている。娘は警告として「水をかけられる」「柄杓で背中を叩かれる」「杓子で頭を叩かれる」。その行為は、その後のお城の主人とのやり取りに結びつく。すなわち、お城の若主人が「**正体を突き止める問**」をすると、なかなか「**正体がわからない答**」「**桶の水**」という看板の宿屋、「**折れた柄杓**」という看板の宿屋、「**破れた穴あき杓子**」という看板の宿屋」と返答する。理解できない「答」ゆえに、聞き手は好奇心を起こし、話の先行きへの期待を高めるといえよう。

さらに、お城の若主人が娘と再会するために行動するが、娘と再会することは、彼にとっての課題であり、「**課題**」は先取りの重要な手法である。松岡氏は「先取りが緊張を生み、聞き手の注意をそらさぬよう話が仕組みられているのです。」と述べている。「猫皮」若主人の課題（舞踏会を再度開いて、不思議な娘

に会う)は、母君の計らいで実現し、課題は達成され、結婚に至る。

物語の終わりで、再度「願望」が語られる。娘は妃となり、子どもを産んで、その子が四歳になると、物乞いの女がやって来る。妃がわが子を通して女にお金を与えると、料理番のばあさんに、再度いじわるなことをいわれる。そのことばに傷つき、お妃は両親のことを思い出す。そして、両親に会いたいと思う(願望)。聞き手は先取りして、お妃が父親に会うことを予想し、幸せな結末、昔話の常套的な結末「それから、三人は、そろって城に帰り、いつまでも幸せに暮らした。」を期待するのである。

以上、昔話の「先取り」の手法に注目して、ジェイコブズの再話した物語を見てきたが、彼の再話した物語の語りには、グリム童話の語りとよく似た、「先取り」の手法が多く用いられていることがわかる。では、先取りと子どもの聞き手には、一体どのような関係があるのだろうか。松岡氏は、以下のように述べている。

ビューラーは、こうした先取りの手法は、集中力や推理力が弱く、先を見通す力に欠ける子どもに適したものと述べています。しかし、同時に、子どもにこれらの力を養う方法でもあったと考えられます。

くり返しを含め、昔話で多用される先取りは、聞き手である子どもたちの物語への関心を深め、積極的にその進展に参加することを可能にします。オオカミが来るかもしれないから気をおつけといわれれば、母ヤギが出かけたあとも注意を集中するし、戸をたたく音を聞けばオオカミか? と推理することもできる。前以ってヒントが与えられているからこそ、それが可能なのです。(中略) 遠い先を見通すことができない子どもでも、物語のそこかしこに先取りの技法により行先を示すヒントが与えられていれば、それを目標に物語を追い、結果的にかなり長い、複雑な話もたのしめるのです。こうした経験をくり返して、自然に集中力や推理力も身につくというわけです。

この主張には説得力があり、グリム童話やジェイコブズのフェアリーテール集が子どもに好まれ、語り継がれる理由の一つは、物語に、このような「先取り」の手法が効果的な使用されていることに負っているといえよう。

## 結 論 ジェイコブズの再話の特徴と子どもの聞き手

筆者は先に、ジェイコブズの *English Fairy Tales* と *Celtic Fairy Tales* について論文を発表した際、ジェイコブズのフェアリーテール集出版の意図を述べた。すなわち、彼の願いは「英国の子どもたちが聴きたがっていて、未だ読む本として出されたことのない、英語のフェアリーテールを、本にして与える」ということであった。また、彼が目指した文体は、「良き婆やがフェアリーテールを語る時の口調で書き記すこと」であった。従って、この書物は「単に目で読まれるだけでなく、声に出して読まれることを意図」して書かれたものであった。

今回、筆者はジェイコブズの *More English Fairy Tales* の内容と文体を、いくつかの切り口で読み説いてみた。つまり彼の再話の特質を、元になる資料の収集法、物語の作成法（合成の仕方）、「繰り返し」の多様性、抽象的様式としての「純化作用」および「先取り」の手法、などに照らして検証したのである。畢竟するに、これらはいずれも子ども読者を魅了するための手法なのである。それゆえ、ジェイコブズが『続 英国の昔話集』を編んで刊行した理由は、彼がその序文に記した以下の文章に尽きるといえよう。My defence might be that I had a cause at heart as sacred as our science of folk-lore - the filling of our children's imaginations with bright trains of images. すなわち、彼はまわりの民俗学者たちが民間伝承のフェアリーテールを神聖なものとして扱うことを願っていたように、彼には彼なりの思いがあり、それは、子どもたちが想像力を湧き立てる心の世界を、楽しい話で満たしてやりたいという心からの願いであった。

この論考の冒頭で筆者は、ジェイコブズが第一のフェアリーテール集を刊行した後、まわりの民俗学者たちから非難されたという事実を述べた。その批判の主な理由は、ジェイコブズが元話を変えたしまったということであった。しかし、ジェイコブズ自身は、過去のフェアリーテールの採集者や素朴な農民たちが、伝承のフェアリーテールを、ある時は語る言語が変わることによって、ある時は地域性によって変えてきた事実を挙げ、自分も同じ仕事をなしたにすぎないと弁解をした。筆者はジェイコブズの反論はもっともであると思っている。

しかしながら、筆者は、ジェイコブズの反論には、二つの点で疑問が残ると

思っている。その一点は彼の再話の意図は過去の人々のなした再話の意図とは根本的に違うのではないかという点である。そしてもう一点は、ジェイコブズ自身も意識していなかったかもしれないが、彼は元話を変えたのではなく、損なわれた形で記録されていたり、流布されていたフェアリーテールを、本来の姿に近い形に復元したのではないと思われる点である。以下、この二点について述べて、この論考を終わることにする。

第一の点は、昔話と子どもに深く関することである。我々が昔話に関して研究をする際、注意しなければならないことは、昔は昔話が必ずしも子ども向けに語られていたわけではないということである。しかしながら、グリムやジェイコブズたちは明らかに子ども読者を意識して再話したということは注目すべきことである。それゆえ、彼らの再話を知るには単に文体だけの問題ではなく、子どもという聞き手のことを知らねばならないと思われる。その点に関して、ビューラーは次のように興味深いことを述べている。

子どもは、わけのわからない話——通常の因果関係や、科学的常識では説明のつかない要素を多分に含んだ話——を喜びます。どうやら、ふつうとは違うレベルでのコミュニケーションが行われているらしい。これは、意識と無意識ということばを使ってしまえば説明がつかのかもしれませんが、要するに、子どもと昔話の関係には、私たちには容易に理解し得ない部分が多分にあるという感じがしてならないのです。

これらの文章からも想像できるが、筆者も昔話と子どもは、なにか深くて大きいものでつながれているように感じている。そこには簡単に説明できない不思議なものがあり、心理学者でもない限り、ことばで説明することは難しい。そこで、我々としては議論を元に戻して、子どもがなぜ昔話を好むかを説明するには、おそらく昔話の内容と文体の検討から試みるしかない。昔話が子どもにとってわかりやすいものであるということは、この論考で述べたように、昔話の持つ語りの特質にある。グリムもジェイコブズも、その特質をよく知っていたに違いない。子どもは物語を論理的に理解して歓ぶのではなく、驚きや興味という大人とは違った観点から、物語をあたかも空腹な人が食べものを本能的に欲しがるように要求するのである。

伝承の昔話は、その語り口を詳細に点検してみると、独特な語り方があることがわかっている。グリムは一九世紀前半に、ジェイコブズは一九世紀末期において、すでにその特性を感じ取って、再話において実現したのである。現代の我々は、世界各国の民俗学者が長年に渡る調査、研究の後、明らかにした昔話の理論を通して、その特質を知っている。しかし、彼らが、このような理論が発表される以前に、その特質を敏感に感じ取って再話のなかに生かしていたことは、驚嘆に値することである。ただ、ジェイコブズは幼いころから昔話を聞いて育ち、その話を覚えていて、自ら語ることできたという事実を考慮すれば、彼が昔話の語り口の特質を自然に身につけていたことは想像に難くない。

もう一つの疑問点については、確かな証拠はないので断定的に述べることはできない。しかし筆者は、ジェイコブズは元話を変えたのではなく、損なわれた形で記録されたり、流布していたフェアリーテールを、本来の伝承の姿に近い形に復元したのではないかと思っている。ジェイコブズ以前の民俗学者たちは昔話を聞き取り採集して活字にした。彼らは過去の資料を元に再話したのだが、語り手ではない彼らの記録は、昔話本来の語り口を民俗学者の視点で書き記したと思われる。そのようにして記録されていた昔話集は、ジェイコブズにとっては、伝承の語り口とは違って見えたに違いない。そこで、彼は自分が幼いころから経験的に知っている「婆やの語り口」に近い文体に直していったと思われる。それは、本来口伝えの昔話の語り口を本のなかに文字として定着させる試みであったに違いない。

ジェイコブズの仕事は、単にフェアリーテール集を刊行したということにとどまらない。彼の功績はきわめて大きなものであった。我々は、彼のフェアリーテール集の一話一話に、子ども読者を楽しませるための見事な再話文体を読み取ることができる。<sup>13</sup> こうしてジェイコブズは一九世紀末に、英国の伝承のフェアリーテールを適切な形で保存し、さらに後世に伝承し得たのである。

我々は昔話を聞き終えた時、時にどこか知らない遠いところへ旅をしてきたような気分させられ、また未知のことなのに親しいことがらに触れたような思いにさせられることがある。そういう意味でいえば、ジェイコブズは今もなお、我々に不思議な魔法をかけ続けているのである。

注

- 1 以下の理論書を参考している。  
マックス・リュテイ、『ヨーロッパの昔話—その形式と本質』、小澤俊夫訳、岩崎美術社、1995年  
——『昔話 その美学と人間像』、小澤俊夫訳、岩波書店、1985年  
小澤俊夫、『昔話の語法』福音館書店、1999年
- 2 再話の研究は、ジェイコブズのものであれば、彼が「元話とした資料」を入手し、さらに一九世紀末の彼が再話出版したフェアリーテール集を比較参照することによって、彼がどのように話の内容を構成し、また文体を作っていったかを読み取ることができる。一方、日本の昔話でも伝承の資料を入手し、ジェイコブズの手法を参考にして現代語に置き換えていくことが可能である。また地方ことばに通じている人であれば、地方ことばを子どもにもわかる標準的なことばに置き換えることも可能である。
- 3 Jacobs, Joseph. *English Fairy Tales*. London: David Nutt, 1890.  
—— *Celtic Fairy Tales*. London: David Nutt, 1892.  
—— *More English Fairy Tales*. New York: G. P Putnam's Sons, 1894.  
—— *More Celtic Fairy Tales*. London: David Nutt, 1894.  
—— *Indian Fairy Tales*. London: David Nutt, 1912.  
—— *European Folk and Fairy Tales*. New York: G. P Putnam's Sons, 1916.
- 4 アンドリュー・ラング (Andrew Lang, 1844-1912)。当時の民俗学者で、ジェイコブズの仕事を高く評価した。彼自身、一二色の色名称かぶせた、一二冊のフェアリーテール集を出版している。  
アルフレッド・トゥルブナー・ナット (Alfred Trübner Nutt, 1856 -1910)、ジェイコブズのフェアリーテール集出版のために、すでに本になっていた版を何冊かを翻案したり、校正刷りを読んだりして援助した。
- 5 ウィリアム・ヘンダーソン (William Henderson, 1813-1891)  
以下のフェアリーテール集で有名。 *Notes on the Folk-Lore of the Northern Counties of England and the Borders*, William Henderson, London.; S. Barinig-Gould, M. A., 1866.
- 6 ロバート・チェンバーズ (Robert Chambers, 1802-71)  
以下のフェアリーテール集で有名。 *Popular Rhymes of Scotland*, Robert Chambers, London: W. & R. Chambers, 1826.
- 7 Jacobs, Joseph. "The Science of Folk Tales and the Problem of Diffusion" *Transactions of the International Folk-Lore Congress*, London: David Nutt, 1892. pp.76-102.
- 8 ladle 柄杓 おそらく金属製で、台所の調理道具「御玉」にあたるもの。
- 9 skimmer 杓子 おそらく金属製で、汁(アク)を取るために用いる穴の開いた大き目のスプーン状の「御玉」。
- 10 小澤俊夫、「ヴィルヘルム・グリムの再話法—同時代人との比較のなかで—」口承文藝研究、第二一号、一九九八年三月、日本口承文藝學會、pp. 1-10.
- 11 松岡享子、「昔話における『先取り』の様式—子どもの文学としての昔話—」、『昔話と俗信—研究と資料』28号、日本昔話学会編・三弥井書店、2000年 本稿は、一九九九年七月三日に、立教女学院短期大学で行われた日本昔話学会での発表である。また、この論文は、森本真実訳、松岡享子編で、東京子ども図書館82号(1999年冬号)に紹介されている。
- 12 シャルロッテ・ビューラー (Charlotte Bühler, 1893-1974)  
ベルリン生まれの心理学者で、幼児発達検査を作成するなど大きな業績があった。1940年アメリカに渡り、南カリフォルニア大学で臨床心理学の研究を行った。 *Das Märchen und die Phantasie des Kindes* 『昔話と子どもの空想』(森本真実訳・松岡享子編)は、ビューラーが昔話を通して子どもの心理をとらえようとした論文で、1918年に「応用心理

学雑誌」に掲載されたものである。その後、ヨゼフィーネ・ビルツの「深層心理学的視点における昔話の出来事と成熟過程」という論文と共に出版され、特に教育者や児童心理学者に、この分野の基本図書として読み継がれてきた。本論文に紹介した文章は、その第四版を抄訳されたものである。

- 13 松岡氏は、昔話の人物像、環境、筋の展開や、その表現様式の特徴を、子どもの空想と関連づけて、以下のように記している。「子どもは、多彩なイメージのつらなりである昔話世界を、強い情動に支えられて生き生きと眺めながら旅をする。直接目に見えるように描かれた出来事や情景は、子どもの興奮や驚き、喜びをさそい、その性質を極端に強調された人物は、子どもの中に共感や反感を呼び起こす。昔話は、これらすべてを外面的で簡潔な文体を用いて叙述するが、この叙述方法が、口伝えを可能にし、支えているのである。」

〔図版〕

Steel, Flora Annie. *English Fairy Tales*. Illustrated by Arthur Rackham, New York: Macmillan Company, 1918.

Jacobs, Joseph. *More English Fairy Tales*. Illustrated by John Dixon Batten, New York: G. P. Putnam's Sons, 1894. p.193.